

目次

○まえがき……………七

第一章 否定表現……………二

第一節 「アラス(ジ)」と「ナシ」……………一三

第二節 二重否定……………三三

第二章 陳述副詞……………四五

第一節 「豈(アニ)」の用法……………四七

第二節 「ナニ」の用法……………七一

第三節 「如何(イカ)」を冠した成語……………九一

第四節 「モシ」「タトヒ」……………一一

第五節 「サダメテ」……………二七

第六節 「アヘテ」「ツユ」「ユメユメ」「スコシモ」「ヨモ」	二二
第七節 「マサニ」「マサシク」	三七
第八節 「カク」「思ハク」	四四
第三章 存在詞	七一
第一節 「あり」と「ゐる」	七三
第二節 「ゐる」と「をり」	九一
第四章 表現類型	一〇九
第一節 「其ノ時」「其ノ時ニ」「時ニ」の用法	一一
第二節 陳述副詞の場合	三八
第五章 写本にみる表記	三九
第一節 合字	四一
第二節 「メ(シテ)」表記	六二
第三節 「ベシ」の表記	三〇三
第四節 異体字について	三〇九
第六章 「イハク」	三五
第七章 「宣ハク」「申サク」	三四五
第八章 敬語表現	三七一

第八節 「カク」「思ハク」

用言に接尾語の「ク」をつけ「……ク」の形で引用文を導くか、または副詞に用いられる語があるが、今昔物語集では「イハク」「思ハク」「宣ハク」「申サク」「願ハクハ」「カク」「カクノゴトシ」などがみられる。これらは和歌などにみる「……なく」「よけく」「まくほし」「あしけく」などの用法と異なつて訓読特有の用法をみるものである。

たくひれのかけまくも欲しき妹が名をこの背の山にかけばいかにあらむ (万葉集・卷三)

筑波嶺のよけくを見れば長き日に思ひ積み来し憂へは息みぬ (万葉集・卷九)

まめなれど何ぞはよけく苺すげの乱てあれど悪けくもなし (古今集・卷十九)

空蟬の空しき骸になるまでも忘れむと思ふ我ならなくに (後選集・卷十三)

思ひしことはかけまくもかしこけれとも (拾遺集・卷九)

「イハク」「思ハク」「宣ハク」「申サク」「願ハクハ」「カク」「カクノゴトシ」

太子ノ宣ハク我今一切衆生ノ為ニ煩惱・結使ノ賊ヲ降伏セムト思フ (卷一・四)

王ノ思ハク善光女ノ云シ如ニ実ニ善悪ノ果報皆先世ノ宿世也 (卷二・二十四)

龍ノ娘ノ云ハク父母ノ教ヘニ依テカク侍ル也 (卷三・十一)

弟子ノ申サク師ニ在セドモ此ハ何ニ見給ゾ (卷四・六)

願ハ我レ来世ニ无上菩提ヲ得テ汝等ガ飢ヘノ苦ビヲ濟ハント思フ (卷五・七)
 気色糸冷氣ニテカク云フハ頗ル不心得ズ (卷六・三)
 如此ク忘ルル事既に千度ニ至ヌ (卷七・二十)

一 カク

「カク」は「カ」(古くは近称として存在したか)に接尾語「ク」を伴つて副詞に転化したものと考えられるが万葉集にみる「カ」は殆ど中称・遠称と考えられるから即断しかねる。

かの子ろと寝ずやなりなむはたすき宇良野の山に月片寄るも (万・三五六五)

しかし、「ク」は「アレ」と合して「カレ」となり、接続詞を生じたと思われることがあるが接続詞の「カレ」と副詞の「カク」はいずれも「このように」あるいは「このような」の意味で共通する面がありそうである。したがって「カク」は「カ」が「ク」を伴つて成立したことにしたがう。

あは妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ。かれ哭くなり。(古事記・上)

カク云フ事无キ人ハ此の天ニ不生ズ (今昔・卷五・三)

今昔物語集に表記された「カク」は卷二から卷五まで殆ど片仮名で表記されている。卷六、卷十、卷十一、卷十二は「カク」「此ク」「如此ク」(カク)が混在するが全体的には卷六から卷十五までは「如此ク(カク)」が主流をなし、卷十六以降は「此ク」と「此」が主流をなしている。ただ「彼」(カク)の表記が卷二十五、卷二十七、卷二十八に若干みられる。訓読調の濃い天竺・震旦部・本朝部前半に片仮名表記の「カク」と「如此ク」